

遠い思い出*

小島義郎

私の傘寿を記念して論文集を出して下さるといふことで、この上ない名誉なものと感激している。私としては少しでも長生きをして辞書のお役に立つよう努力をしなくてはならない。

私の生まれたのは昭和3年でまだ「昭和の大正」と呼ばれていた頃のことである。ちょうどその年は昭和天皇の即位のご大典に当たっており、クラスメートにも「昭三^{ショウゾウ}」とか「大典^{ダイスケ}」という名が多かった。

私は父の勤めの関係で長野県で生まれて間もなく九州の長崎に引っ越したので、長野県のことは全く記憶にない。私は長崎のはずれの浦上という所で育った。そこから市の中心の学校まで市電で通った。浦上にも学校はあったが、母のこだわりで師範学校の付属小学校まで通ったのである。

長崎は自然が美しく、人情も細やかで私にとってはまさになつかしい故郷という感じが強かった。私がいたのは浦上天主堂をすぐ斜め下に眺める小高い丘の上である。そのあたりは原爆記念像を中心とした平和公園となっている。付近は有名なキリシタン村で、毎日朝早くから下の通りをミサに通う下駄の音がカラコロンとひびくのを聞いて育った。

小学校に入学したのが昭和10年で、それから6年生の1学期までは平和で楽しい生活を送った。もちろん支那事変を境として軍部の勢いは強まっていったが、まあ何とか平和な生活と言えると思う。

もしこのまま生活を続けていれば、昭和20年の原爆の投下にまきこまれて、爆心地から200メートルの我が家では到底助かる見込みはなかったであろう。

*: この *Lexicon No. 38* は小島義郎先生の傘寿記念号として出版を予定していました。編集に手間取っている間に小島先生がご逝去されるという事態になり先生の追悼号となってしまう、返す返すも残念であり申し訳ない想いです。先生の「遠い思い出」は傘寿記念号に寄稿されたものですが、先生の生前の最後の手記としてここに掲載いたします。

我が家は私の転校を機に東京へ引っ越したので現実の被害はなかったが、私は何よりもなつかしい故郷が原爆の瓦礫の中に埋まってしまったこと、そしてなつかしい友人たちが大勢犠牲になったことが悲しかった。私の頭には天主堂のマリア像が無惨にもくずれ落ちている光景がいつまでも浮かんだ。

私は6年生の2学期から東京の小学校に転校した。昭和16年の12月、つまり私が旧制中学の1年の終わりに日米が開戦となった。間もなく戦況は悪化し、食糧不足、空襲、そして戦火の拡大となり、私たち中学生も工場動員に駆り出された。もう勉強どころではなくなった。

そして混乱の中に中学校は4年で卒業ということになり、私は当時の東京外事専門学校(=東京外国語学校)を受験した。戦争は末期であったがまだ続いていた。私は当時医者になるべく旧制高校の理化乙種を受験するように家族に言われていたが、私にはどうしても東京外語を受けたい理由があった。私は「戦争」という雰囲気になじまず、とくに英米語の文学作品にあこがれていたこと、また同時に東京外語出身の担当教師山川喜久男先生、東京文理大出身の芹沢栄先生、同じく廣瀬泰三先生の応援があったからである。

私が入学した当時はまだ戦争中であったが、やがて昭和20年の8月に終戦となり、やっとほっと一息ついたのであった。空襲も灯火管制もない世の中が信じられなかった。しかし、それからは食糧不足に悩まされた。東京外語も食糧休暇と称して長い休暇があった。また私たちの学力が大変落ちていて、それを補うためにあえて *Kings Crown Reader* の5年生用のおさらいまでしなくてはならなかった。

私は昭和23年の卒業で、その年の担当の先生には岩崎民平先生、安藤一郎先生、小川芳男先生、大谷敏治先生がおられるが、皆亡くなられた。現在は梶木隆一先生のみがご健在である。

私たちのクラスメートに竹林滋君という人が居た。彼は教練の授業を欠席して留年した人であるが、我々とは比較にならない秀才である。岩崎先生のもとで音声学を習いたいということであったが、岩崎先生に認められて辞書の手伝いをしていた。

やがて、3年間はまたたく間に過ぎて、私は母校の教師になった。まだ連合軍による占領は続いていたが、世の中も少しは落ち着いてきた頃である。

なお私の姓について一言言っておかねばならない。私は母方の姓をついだので「小島」という名になっているが、東京外語以前は「西原」という姓だった。

昭和26年に占領軍の肝煎りでガリオア(GARIOA)という奨学金の募集があった。これは Government Aid and Relief in Occupied Areas の略で、日本は

じめ占領地の若者にアメリカを見てもらおうという試みの第3回目である。因みにこれは占領が終わると移行してフルブライト奨学金となった。

これに私は大した自信もなく応募した。そして合格したのである。この合格が私の大きな転機となった。私の23歳の時である。

私は当時有名なミシガン大学を望んだが希望は入れられず、テキサス州のオースティン (Austin) の州立テキサス大学で学ぶことになった。

私はヘイドン教授 (Dr. Haden) の指導のもとに Trager & Smith: *An Outline of English Structure* を読みはじめた。はじめはなじめなかったが、やがて Trager & Bloch: *Syllabic Phonemes of English*, そして Leonard Bloomfield: *Language* と読み進むうちにすっかり構造主義言語学 (Structural Linguistics) のとりこになってしまった。この10年間の言語学の進歩から我々はすでに取り残されてしまったことに気がついた。同時に C. C. Fries の教授法の本を読み、ますますその感を強く持った。私はこれからこれで新しい分野を開拓しようという気になったのである。

帰国後は南山大学、日本大学、早稲田大学と職場は転々としたが、文学作品よりも語学的なものに興味をもった。やがて10年ほどしてから私のもとに岩崎先生から辞書の改訂の仕事がまい込んだ。私は辞書の勉強も窮極的には外国語教育の一環であると考えてお引受けしたのである。爾来40年、私には辞書ではとくに和英辞典が魅力的だった。辞書に対する考え方もいろいろあるが、私が岩崎先生のおそばで勉強したものはまさに私の考えに沿うものであったと確信している。

会員研究業績

(2007年1月～12月、アイウエオ順)

- Akasu, Kaoru (赤須 薫). "The Iwasaki Linguistic Circle and Dictionary Analysis." *Kernerman Dictionary News*, No. 15.
- . 『ライトハウス英和辞典』第5版。(竹林 滋氏他と共編) 研究社。
- 池田和夫. 『ライトハウス英和辞典』第5版。(編集委員) 研究社。
- 石井康毅. 『道を歩けば前置詞がわかる』(宗宮喜代子氏他と共著). くろしお出版。
- 磯崎聡子. "47 ache Words in English." *Random*, No. 32. 東京外国語大学大学院英語英文学研究会。
- 井上 清. 「現代日英比較表現の研究」(承前—16) 『目白大学文学・言語学研究』第3号。
- Ueda, Hiroto (上田博人). "Correlación entre final de palabra y género gramatical en español." *Vernetzungen, Bedeutung in Wort, Satz und Text. Festschrift für Gerd Wotjack zum 65. Geburtstag*, Band 1. (Herausgegeben von Juan Cuartero Otal und Martina Emsel).
- Uchida, Satoru (内田 諭). 「人間関係のメタファーにおけるスキーマ類型」(水野真紀子・アニタ ナジ・大堀壽夫氏と共著) 『日本認知言語学会論文集』第7巻。
- . "A FrameNet Approach to Connectives: The Polysemy of *while*." (with Seiko Fujii) *The Proceedings of the 10th Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics*.
- 大塚みさ. 「学生の辞書利用の実態についての小調査3——辞書利用履歴の記録法による試み——」 『歌子』第15号. 実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科。
- Ogura, Mieko (小倉美恵子). "Lexical Diffusion and Complex Adaptive System." 『近代英語研究』第23号. 近代英語協会。
- 川村晶彦. 「ネイティブ33人を徹底取材! これがネイティブの英語感覚です」(監修) 『NHK 英語でしゃべらナイト』2月号。